

能登半島地震から学ぶ!

vol.1

平成十九年三月二十五日(日)に発生した能登半島地震。被災者の生活復興のため災害ボランティアセンター(以下災害VC)が設置されました。四月四日から一週間、輪島市災害VC輪島の支援に入った北川が、今月から三回にわたり連続レポートさせていただきます。

何のための「災害ボランティアセンター」なの?

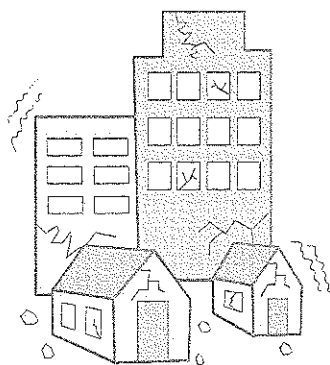
私が訪れたのは、地震発生から十日目。県内外から毎日やってくるボランティアの対応や、被災者に対する広報と活動依頼の受付、そしてボランティアと活動を結びつけるマッチングを行い、災害VCのスタッフ誰しもが一生涯懸命それぞれの役割をこなしています。スタッフの中心は北信越地域から応援に入っている外部の社協職員と地元青年会議所(JC)のメンバーが中心です。被災地である輪島市社協職員は、社協本体の建て直しに忙殺され、ほとんど災害VCに関われないのが現状でした。被災者からあがってくる活動依頼(ニーズ)は家の内外の後片付けばかりで、その数も日に日に少なくなっていく程度でした。

「本当に被災者のニーズは片付けだけなのか?」という疑問が沸々とわく中、あるスタッフが早朝散歩をしていたところ、通りすがりの全く面識のない地元のお年寄りに、突然「わしの家の蔵が壊されちまったんだ、見てってくれ!」と泣きすがられました。案内された自宅は漆器店で、庭には取り壊し途中の蔵があり、中に入っていた輪

島塗の漆器が並べられています。地震で蔵がやられ、昨日から取り壊し作業が始まったとのこと。「仕方がないと思っていたのに、今朝、壊されている蔵を見たら悲しくて悲しくて!」。スタッフはひとしきり、先祖から受け継いだ蔵にまつわる昔話を聞き、思わず一緒に泣いてしまったそうです。それを見たお年寄りは、「ありがとう、ありがとう、すまんかったなあ」と言いつて輪島塗の箸を一膳持たせてくれました。

災害VCは、誰のため、何のためにあるのでしょうか?家の後片付けも当然大切な被災者支援の活動のひとつですし、たくさん駆けつけるボランティアを上手にさばくことも災害VCとして必要です。でも、その原点には「被災者中心」という言葉があるように思います。蔵を壊されたお年寄りのように、これから本当にづらい現実と向き合っていくなくてはならない被災地の人々はたくさんいるはずであり、そのような中で、ボランティアとして被災者に寄り添うとはどのようなことなのかを考え、活動に結びつけることが重要なのではないのでしょうか。

災害VC運営の仕組みやマニュアルにただ流されない、被災者の視点にたった災害VCでありたいものです。



みやぎボランティア総合センター スタッフ紹介

4月から始まった新年度の生活も、1ヶ月が経過しました。みやぎボランティア総合センターも4月より2名のスタッフに変更となりました。今年度も、様々な形で多くの皆様と協働してゆくスタッフを紹介します。

☆センター所長 北川 進

二年ぶりに戻ってまいりました。

☆大和田 学

今年で二年目、更なるネットワークを広げます。

☆菅原 賀代

ボランティアの世界へ初めて飛び込みます。

☆池田 倫子

ボランティア保険を担当する最若手です。



宮城県社会福祉協議会
みやぎボランティア総合センター

〒980-0014 仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館内 1F
TEL 022-222-0010 FAX 022-217-9388
URL <http://www.miyagi-sfk.net>
e-mail g040@miyagi-sfk.net